

静岡県下における19世紀鑄造錢貨の遺失経過について

岩 名 建太郎

要旨 特定地域の貨幣の流通状況を通史的に追跡するために、比較的出土量に恵まれていて、流通が短期間に限定される特長的な貨幣種の事例を集成・分類し、一つの基準、モデルをつくり、他の貨幣種と比較する方法が考えられる。

日本列島のほぼ中部に位置する静岡県（旧遠江・駿河・伊豆3国）内において、近世錢貨の中で最も年代的に新しく、流通期間も比較的短い、19世紀に鑄造された錢貨である天保通寶と文久永寶の出土事例を集成し、特にそれら錢貨埋没時の性格を深く反映させる遺失経過を分析検討し、その外見的特長を把握すると共に、類型設定を試みる。

キーワード：天保通寶、文久永寶、出土事例集成、遺失経過、類型設定

はじめに

過去、日本列島内において流通した錢貨について、古くから、好古家、古泉家の手によって、何百何千という分類がなされ、数多の錢譜が編まれてきた。

出土錢貨資料に対する援用は、個々の遺跡発掘調査報告書の中で、報告者の判断で錢譜より引かれた分類名称が用いられることが間々あるが、鑄造量が多大で、長期に渡る発行・流通がなされ、錢銘のヴァリエーションが最も豊富である近世錢貨の代表ともいべき寛永通寶といえども、複数の遺跡間で共有できる分類数は、決して多くなく（ある程度の表面劣化でも識別出来る錢銘の特長、材質差から、古寛永錢、寛文錢、新寛永錢、鉄錢、四文錢の5分類に集約され、利用されることが多い）、潜在的に利用可能な網と実際に使われている網の目の差は、大きいと言える。

また、出土した錢貨に関わる古人の活動や検出遺構の年代決定は、そのまとまりの中にある初鑄年最新錢によってその上限が設定されるが、長期流通している錢貨の厚い堆積の中に新しい錢貨が浸透し、特定の年代相を形成していく経過について、都市部では、副葬錢（六道錢）組成研究の関連で一定成果を上げているものの、地方において、資料数が少ない（絶対的な埋蔵数量というよりも、発掘調査の起因となる工事数差によるものと考えられる）等の理由で、十分な把握がされていない。

これを解消するための一策として、その地域で、一定出土量のある、特定錢貨の流通（市場浸透）、遺失・回収の経過を追い、他の年代の錢貨の出土状況と比較する作業が考えられる。

本稿では、比較的抽出が容易で、分類のヴァリエーションが整い、また、錢貨の中で年代的に最も新しく、実質流通期間の短い19世紀に鑄造された錢貨の静岡県下の出土状況を概観し、それらの流通・遺失モデルをつくることを目的とする。

1 対象となる錢貨の概要

今回分析対象とする19世紀鑄造錢貨は、天保通寶と文久永寶である。

天保通寶は、天保6（1835）年より明治3（1870）年まで断続的に鑄造・発行された、小判形状（長径4.87cm、幅3.22cm）した大型錢貨である。

当百文の錢（金1両の交換相場を錢4000文として、100/4000両＝25/1000両相当）として定められたが、錢相場の変動や大量の密造錢によって、流通価値は、低下し、旧1両を1円とする明治の新貨幣制度導入の際、補助貨幣として、その使用の継続が認められた時には、8厘（8/1000円）と定められた。

江戸幕府が鑄造した天保通寶は、約4億8500万枚であるが、明治時代、新貨幣と交換された天保錢は、5億

8700万枚に及んだ。

文久永寶は、文久3（1863）年明治2（1869）年まで断続的に鑄造・発行された小型錢貨で、鑄造量は、8億9000万枚と記録されている。

当四文の錢（金1両錢4000文の相場で1/1000両相当）とされ、背面には、明和6（1769）年以降鑄造発行された寛永通寶当四文錢と同様、十一波文様が付されている。

明治新貨幣制度下では、1厘半（1.5/1000円）と定められた。

古泉界では、錢銘の書体の差異によって、「文」の字が楷書体の通称「真文」、草書体の通称「草文」、「寶」が「宝」となっている通称「玉宝」または、「略宝」の3種に大きく分けられる。

法律上、天保通寶は、明治24（1891）年、文久永寶は、昭和28（1953）年まで、使用可能であったが、補助貨幣として、一時に使用出来る制限（1円分まで）があった。また、年代を経て物価上昇があり、現実的に近世錢貨の使用の場は、小規模な売買取引での小額決済に限定されたとみられる。

2 静岡県下の錢種別出土分布傾向

(1) 天保通寶

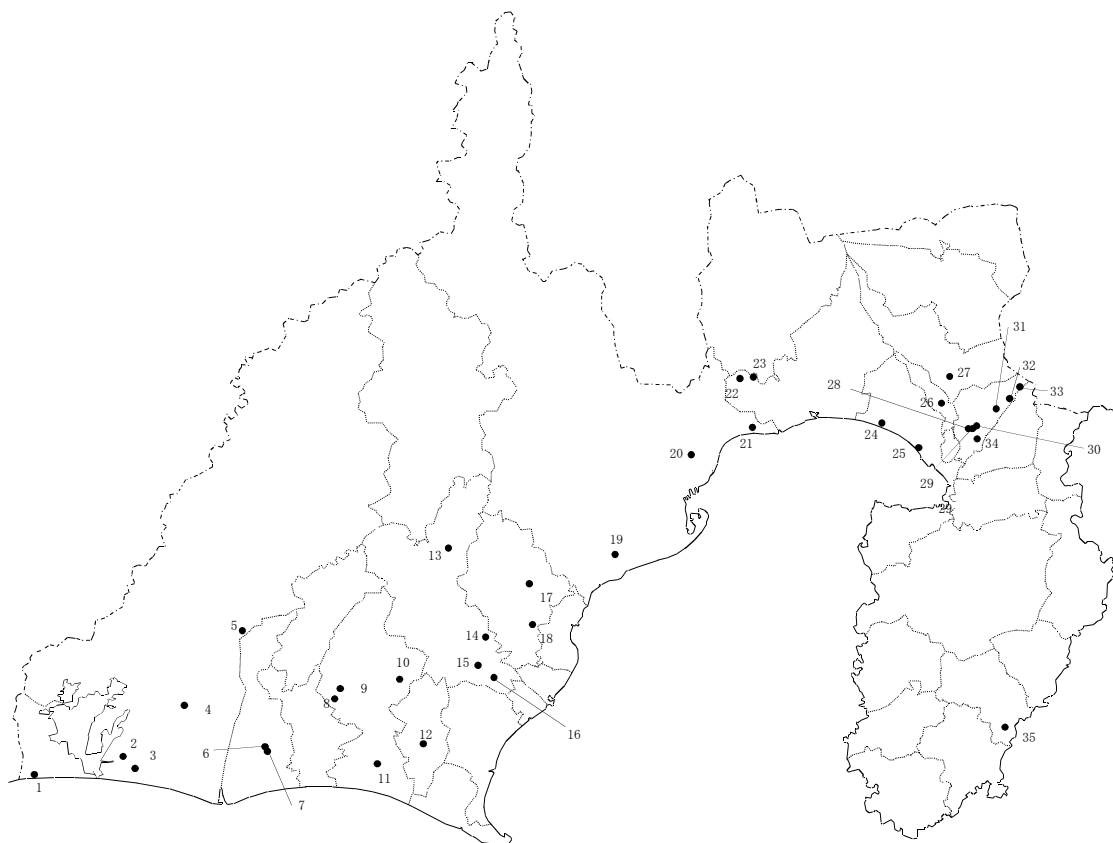
静岡県下における天保通寶の出土報告例は、管見のところ、7遺跡7点で、1箇所での複数出土例は、確認されない。資料数が少ないが、地域的偏在の無い出土分布傾向を示している。

(2) 文久永寶

文久永寶の出土報告例は、31遺跡89点ある。

錢銘の内容は、真文28点、草文30点、玉宝11点、不特定20点となっており、全体的には、真文と草文の枚数が拮抗している。

大河川を境界とした小地域毎の状況は、天竜川以西では、真文、玉宝は、出土例が無く草文優位（5点）、天竜川・大井川間では、真文7点、草文6点と拮抗状態、大井川・安倍川間では、真文8点、草文3点と真文優位、安倍川・富士川間では、真文3点、草文7点と逆に草文優位、富士川以東では、真文10点に対し、草文9点と拮抗状態と、各々異なっている。



静岡県 19世紀鑄造錢貨出土遺跡分布図

静岡県内 19世紀鋳造銭貨出土状況一覧表

	遺 跡 名	所 在 地	調査区・グリッド	遺構・層位	天保 通寶	文 久 永 寶		
						真文	草文	玉宝
1	長谷元屋敷遺跡	湖西市白須賀	B-5区	第2層				1
2	中平遺跡	浜松市中区西鴨江町1182番地他	I11グリッド	表土層	1			
3	城山遺跡	浜松市南区若林町514番地					1	
4	下滝遺跡群	浜松市東区半田町3738番地の9他	4・5-1区B8b8グリッド 7区E8b3グリッド 6-2区南D4f1,f2グリッド	遺構面上 遺構面上 SK44（土坑墓）			1 1 2	
5	三蔵塚古墳群	浜松市天竜区二俣町阿蔵304-1	東区			1		
6	一の谷中世墳墓群 遺跡	磐田市見付字一の谷および水堀	3E区 13B区				1 1	
7	野口・マカダ 近世墳墓群遺跡	磐田市西貝塚1769-1他	G1グリッド	SK25（土坑墓）		1		
8	原川遺跡	掛川市領家字原川	1区 9区西側	表面採集 ①層		1		
9	打越遺跡	掛川市家代	東から南斜面中腹より裾				1	
10	清水遺跡	掛川市日坂	2-2区 C-9グリッド	SX125(遺物集中箇所)	1			
11	高天神城跡	掛川市上土方嶺向翁山3138-2	二の丸 K-18グリッド			2		
12	御領所遺跡	菊川市西横地		SR01（旧河川）	1			
13	馬場平経塚	島田市川根町笹間下字馬場下		川原石石列周辺			1	
14	東光寺五輪塔遺跡	島田市東光寺屋敷654番地		1号集石墓 表面採集			1	
15	御陣屋遺跡	島田市大津道上中溝南1999番地地先	第2トレンチ 第8トレンチ 第16トレンチ 御陣屋稲荷本殿跡 3区		1	1		2 2 13
16	高根森遺跡	島田市阪本地先	1区	2層		1		
17	入野東古墳群・ 入野高岸古窯群	藤枝市岡部町入野				1		
18	田中城下屋敷遺跡	藤枝市田中3丁目15-1他	11T旧六間川			1		
19	駿府城跡	静岡市葵区駿府公園1番1号 静岡市葵区追手町229-3	本丸堀Ⅰ区 本丸28Tr 米蔵跡A地区 東御門・渡櫓 二ノ丸水路跡 三ノ丸堀 2トレンチ	埋土 攪乱土層 包含層 遺構検出面 排土中 覆土上層暗灰色粘土層		1 2 1 1	1 2 1	
20	小島陣屋跡	静岡市清水区小島本町字構内	17区	盛土			1	
21	蒲原城跡	静岡市清水区蒲原	E-4区					1
22	送り神遺跡	富士市北松野	E-11区		1			
23	中野遺跡	富士市中野台	中野B地区		1			
24	雄鹿塚遺跡	沼津市一本松ミサゴ塚		表面採集			2	
25	千本遺跡	沼津市本字千本1910-206	A4-1グリッド				1	
26	長久保城跡	駿東郡長泉町下長窪	八幡曲輪・上野南地区	表土または攪乱層			1	
27	大畑遺跡	裾野市大畑	中屋敷地区 C-2グリッド 中屋敷地区 C-3グリッド	第Ⅰ層 第Ⅰ層		1		1
28	三島御殿遺跡	三島市本町1792-2番地	第1地点			1		
29	三島代官所	三島市北田町1443-5番地		表面採集	1			1
30	三嶋大社境内遺跡	三島市大宮町2丁目1番5号	第1地点	1号土坑		1		
31	奥山遺跡	三島市三ツ谷新田				1		
32	山中城跡	三島市山中新田	西ノ丸土橋 三ノ丸第1地点	表土 5P 43号土坑 45号土坑			1 1	
33	接待茶屋遺跡	三島市施行平4736-18他		第4層 第5層		1 1	2 1	
34	茶白山遺跡	三島市谷田字茶白山862-1-2番地				1	1	
35	河津城跡	賀茂郡河津町笹原379-1外	2郭から4郭	表土		2		
静岡県内合計					7	28	30	11 20

3 遺構・遺物集中箇所の出土例

ほとんどの出土19世紀鋳造銭貨は、表面採集または、表土・包含層中からの検出であるが、土坑遺構や遺物集中箇所から検出された例がいくつか存在する。

(1) 下滝遺跡群土坑墓SK44

平成元（1989）年より浜松市半田町で実施された下滝遺跡群（下滝遺跡・矢海道遺跡・下滝A～I古墳群・半田山G古墳群）発掘調査では、近世に比定される墓・焼壁土壙が合計40基検出されている。

その内の土坑墓1基、長径1.04m、短径0.8m、深さ0.28mで、平面形略円形を呈するSK44より文久永寶2点（共に草文）が出土している。

(2) 野口・マカダ近世墳墓群遺跡土坑墓SK25

平成9（1997）年、磐田市西貝塚で実施された野口・マカダ近世墳墓群遺跡発掘調査では、中世から近現代に比定される119基の土坑墓、2基の塚墓、4基の火葬墓が検出されている。

その内の土坑墓1基、長径1.13m、短径0.71m、深さ0.67mで、平面形長方形を呈するSK25の底面直上より文久永寶6点（真文1点、草文3点、玉宝1点）が出土している。同時に出土した人骨は、底面より10cm程度浮き、銭貨と比高差が認められることから、座葬の棺外に副葬されたものと報告されている。

(3) 清水遺跡遺物集中箇所SX125

平成4（1992）年7月から同6（1994）年3月に掛川市日坂で実施された清水遺跡発掘調査では、近世宿町である日坂宿の町屋跡が検出された。

その中の調査区2-2区内の小谷に北側宅地からの投棄とみられる遺物集中箇所SX125が認められ、この中に天保通寶1点が出土している。

SX125を構成する遺物の内容は、18世紀前半から19世紀中ごろの陶磁器を主体とし、ほかに鎌、小刀、煙管、渡金金属片が含まれ、銭貨も天保通寶以外に寛永通寶14点（古寛永1点、新寛永12点、寛永四文銭1点）が出土している。

嘉永5（1852）年に日坂宿で大火があり、その際の被災物が廃棄されたものと推定されており、文久永寶が含まれていないことから年代的矛盾は、無い。

(4) 東光寺五輪塔遺跡1号集石墓

平成16（2004）年10月から同17（2005）年3月に島田

市東光寺屋敷で実施された東光寺五輪塔遺跡発掘調査で、6個体分の五輪塔が起立していた下位より1号集石墓が検出された。

古瀬戸前期様式IV期の四耳壺、在地産甕、常滑6a型式壺の合計3個の蔵骨器のほか、13世紀後半に比定される山茶碗・小皿、常滑産壺・甕片が出土し、14世紀代の築造と推定されたが、同時に文久永寶1点（草文）、寛永通寶7点（いずれも新寛永）、19世紀前半の肥前系磁器の染付丸碗、18世紀末から19世紀のかわらけが出土しており、近世末に簡単な供献祭祀が行われた形跡があった。

(5) 三嶋大社境内遺跡1号土坑

昭和62（1987）年に三島市大宮町で実施された三嶋大社境内遺跡発掘調査で検出された南北径3.28m、深さ0.75mで、平面形不整円形を呈する第1号土坑より、文久永寶1点（真文）が出土している。

他の出土遺物は、土師器、須恵器、灰釉陶器、陶磁器、かわらけ、瓦器、瓦、釘等、古墳時代より江戸時代に至る。以降の帰属時期は、大多数を占めるかわらけより、13～14世紀中心とする年代と報告されている。文久永寶については、遺構との平面上の重複の可能性が高い。

(6) 山中城跡三ノ丸43・45号土坑

平成元（1989）年に三島市山中新田で実施された山中城跡三ノ丸第1地点発掘調査で近世山中宿の一部とみられる井戸、土坑群が検出された。

検出された土坑の内、長径1.3m、短径1.2m、深さ0.14mで、平面形楕円形、底面は、鍋底形を呈する43号土坑と長径1.55m、短径1.25m、深さ0.68mで、同じく平面形楕円形、底面鍋底形を呈し、厚い焼土層がある45号土坑で各々1点ずつ文久永寶が出土（43号土坑は、玉宝、45号土坑は、真文）している。

両者は、平面上、一部重複して切り合い関係にあり、45号土坑のほうが新しい。

いずれも陶磁器、土器類が埋まっており、各々から出土した丸碗片の接合が確認されるなど、限定された範囲でゴミ穴の掘削・埋め立てが繰り返行われたことが分かる。

45号土坑は、ほかにもう1点、銭貨（新寛永）が出土している。

4 周辺より多数の近世銭貨、近代貨幣が出土する事例

(1) 御陣屋遺跡

平成4（1992）年より同8（1996）年の間に島田市大津通で4次に渡り実施された御陣屋遺跡発掘調査で、調査対象区内にある稲荷神社本殿及びその周辺で多量の銭貨、小額近代貨幣が出土している。

内容は、稲荷神社本殿跡で、中世渡来銭1点（政和通寶真書）、寛永通寶47点、文久永寶21点、近代小額貨幣71点の出土。本殿北側に設定されたトレンチ（第1トレンチ）より、寛永通寶3点出土。西側に設定されたトレンチ（第2・16トレンチ）より、中世渡来銭1点（永樂通寶）、寛永通寶9点、天保通寶1点、文久永寶4点、近代小額貨幣2点出土している。

神社賽銭の一部と考えられる資料である。

(2) 接待茶屋遺跡

平成6（1994）年に三島市施行平で実施された接待茶屋遺跡発掘調査で、3層の遺物包含層で銭貨が出土した。このときの調査の実掘面積は、1350㎡であり、江戸末期及び明治時代に再興された東海道を往来する人馬の接待所関連の遺構が検出されている。

銭貨が出土した包含層上層の4層からは、寛永通寶20点、文久永寶3点、不明銭貨2点、近代小額貨幣2点が出土。中層の5層からは、寛永通寶5点、文久永寶2点が出土。下層の6層からは、文久永寶は、出土せず、寛永通寶が37点出土している。内36点は、まとめり、ある程度、錆着した状態で検出された。

これらの銭貨・貨幣は、接待茶屋営業に関わる金銭であろうが、6層の36点のまとめりを除き、複数が錆着している例は、4層に1セット2枚錆着しているものを数えるのみである。多くは、頻繁な金銭の遣り取りの場での落物である可能性が高い。

5 遺失経過の類型化

貨幣が製作・発行、流通ののち、市場からその姿が消える理由としては、①経済政策上の要請による回収活動、素材金属転用のための回収活動。②回収不可能、または、貨幣を媒介とした経済活動を行わない相手への贈与・支払。③忘失・紛失。④廃棄が挙げられる。

この内、①は、実物そのものが消失しているため、考古

学的アプローチで、その内容を追及することは、難しい。

②の「相手」として念頭される者は、神仏や死者であり、これに関わる貨幣は、宗教・祭祀的意味合いを帯びている。

③は、貨幣の市場流通の場からの所有者の意図していなかった逸脱である。

④は、貨幣の経済交換財としての価値、金属素材的価値から、合理的説明がつきにくく、一部②と内容が重複する可能性もあるが、発掘調査結果として、この項目に該当する事例があることも事実である。

前項2・3・4において、静岡県下の19世紀鑄造銭貨の出土状況を概観したが、銭貨の遺失経過に注目し、類型化を進めることとする。

神仏に供献される銭貨資料の代表例として、神社賽銭とみられる島田市御陣屋遺跡の事例が挙げられる。

注意すべきは、賽銭となった銭貨が全て遺失銭として、その場の残されたものではないと考えられることであるが、神社本殿という祭祀場周辺のやや広がった範囲で、後々の市場利用を目的とした回収のために用意・指定された収容具（賽銭箱）から外れた貨幣が散在して（元々は、表出して）いて、永年に渡って、回収を試みられた形跡が認められないのである。宗教・祭祀を司る者の意識の問題として注目されよう。

島田市（旧川根町）馬場平経塚（近世末の礫石経塚）の石列周辺出土文久永寶も、神仏に供献された銭貨の一つであろう。

文久永寶のほかにも比較的通用価値が高い天保通寶が単独ながら含まれているが、単数の貨幣を供えるという形式を外している訳でない。出土している多量の近代小額貨幣に雑じって、明治時代の竜20銭銀貨が存在していることと同様に、供献者が奮発した例として捉えられる。

死者に供えられる銭貨について、文久永寶を伴う事例では、その形態は、二つに分けられる。

一つは、死者と共に墓内に副葬されるケースで、浜松市下滝遺跡群、磐田市野口・マカダ近世墳墓群遺跡にみられる。資料の増加により、副葬された位置、銭貨の枚数等をもとにした、墓制の小分類が設定出来る可能性がある。

もう一つは、墓外で行われる追供養に類するもので、島田市東光寺五輪塔遺跡例のように「墓前に供え」られた銭貨である。これらも、表出しているが回収されることな

く、置かれ続ける。

墓域と設定された範囲での表面採集品、表土・包含層出土品の中に、こうした墓外供献銭が含まれている可能性は、高い。ただし、その供献年代と埋葬者の没年に隔たりがあってもおかしくないことに注意しなければならない。

また、元々、墓内副葬銭が、後年の墓穴造営により掘り返され、表出し、これが回収されなかった場合の想定も必要である。

銭貨の忘失・紛失を招きやすい現場は、前者であれば、収蔵場所、後者であれば、頻繁に銭貨が行き交う市場店頭であろう。

三島市接待茶屋遺跡の上中位包含層出土銭貨の多くが、不注意、軽微な事故を原因とした商取引中・後の遺失であると考えられる。

比較的通用価値の高い貨幣の取り扱いについては、低いものよりも慎重・丁寧になることは、普通であろう。接待茶屋遺跡では、全体で71点の近世銭貨、近代小額貨幣が出土しているが、金・銀貨は、もちろん、天保通寶も残されていない。

19世紀鑄造銭貨を含んでいないが、接待茶屋遺跡下位包含層で複数（一定量）まとまって出土した銭貨については、収蔵場所から、持ち出されなかった忘失物と考えることが出来る。

富士市送り神遺跡E-11区、中野遺跡中野B地区では、各々、天保通寶が出土しているが、いずれも単独検出で、商取引に伴う収蔵忘失、紛失よりも、宗教・祭祀的供献物としての可能性が強いと指摘出来る。

天保通寶、文久永寶を含んだ収蔵忘失銭は、静岡県内だと、確認されていない。

廃棄銭貨（正しくは、廃棄物と共伴する銭貨）の例は、掛川市清水遺跡、三島市山中城跡三ノ丸の例がある。

いずれも、廃棄物と分かる陶磁器・土器・金属器等が混合した中に銭貨が含まれるものである。

混入経緯・意図が不明であり、祭祀的行為の可能性があるが、定型的であると言ひ難い。

6 まとめ

以上、静岡県下の19世紀鑄造銭貨出土事例に対して、その遺失経過に注目し、類型化を試みてきた、最後に、単純な出土記録から判断する分類方法について補足する。

特定範囲に多量の銭貨が重なること無く、各々単独で検出される場合、元々表出していた祭祀的供献銭か、商取引場の紛失銭の可能性はある。

両者の見分け方について、絶対的であると言えないが、比較的通用価値の高い天保通寶が含まれている場合は、祭祀的供献銭が想定出来る。

いずれにしても、銭貨のみならず、その周辺の情報が重視されるのは、言うまでもない。

引用・参考文献

- 足立順司 大隈信好 1980 『三蔵塚古墳群発掘調査報告書』 天竜市教育委員会
- 足立順司 1991 静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第26集『原川遺跡Ⅳ 本文編』 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 足立順司 1996 静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第80集『水井遺跡・清水遺跡』 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 芦川忠利 辻真人 池谷初恵 1995 『三島代官所・市ヶ原廃寺関連遺跡Ⅰ』 三島市教育委員会
- 芦澤玲子 2002 沼津市文化財調査報告書第79集『千本遺跡発掘調査報告書』 沼津市教育委員会
- 新井正樹 2005 「(13) 小島陣屋 (第4次調査)」『ふちゅ〜 No.13』 静岡市教育委員会
- 池田将夫 1991 『田中城下屋敷遺跡発掘調査報告書』 藤枝市教育委員会
- 稲垣甲子男 1975 台山・峰山文化財発掘調査概報第1輯『大平・送り神遺跡』 富士川町台山・峰山文化財発掘調査委員会 富士川町教育委員会
- 稲垣甲子男 1984 『中野遺跡第2・3次調査報告書』 富士川町教育委員会
- 井鍋誉之 2006 静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第166集『宮浦Ⅱ遺跡・高根森遺跡・高根森古墳群』 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 大林元 2001 静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第127集『御領所遺跡』 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 鬼沢勝人 夏目不比等 2004 『史跡 高天神城跡 二の丸ゾーン発掘調査報告書』 大東町教育委員会
- 川口安曇 室内美香 木村弘之 1998 『野口・マカダ近世墳墓群遺跡発掘調査報告書』 磐田市教育委員会
- 後藤建一 石川浩久 1987 『長谷元屋敷遺跡』 湖西市教育委員会
- 佐野一夫 齊藤香織 1997 『下滝遺跡群』 財団法人浜松市文化協会
- 坂巻隆一 1999 静岡県島田市埋蔵文化財報告第30集『御陣屋遺跡』 島田市教育委員会
- 櫻木晋一 2009 『貨幣考古学序説』 慶應義塾大学出版会
- 篠ヶ谷路人 坂下俊介 2006 静岡県島田市埋蔵文化財報告第38集『東光寺五輪塔遺跡』 島田市教育委員会
- 鈴木一守 鈴木敏則 1982 『西鴨江 中平遺跡』 浜松市

教育委員会

鈴木公雄 1999 『出土銭貨の研究』 東京大学出版会

鈴木重治 鈴木良孝 1988 『馬場平経塚発掘調査報告』
川根町教育委員会

鈴木敏中 1984 「第Ⅲ章遺跡各説 第2節奥山遺跡」『一
般国道1号線三ツ谷バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書』
三島市教育委員会

鈴木敏中 1985 「第6章出土遺物 第7節その他の出土遺
物」『史跡 山中城跡 第2分冊』 山中城発掘調査団
三島市教育委員会

鈴木敏中 岡本範之 池谷初恵 1990 『三嶋大社境内遺跡
Ⅰ』 三島市教育委員会

鈴木敏中 1992 「3. 茶臼山遺跡」『三島市埋蔵文化財発
掘調査報告Ⅰ』 三島市教育委員会

鈴木敏中 伊藤恒彦 池谷初恵 辻真人ほか 1995 『山中
城跡三ノ丸第1地点』 三島市教育委員会

鈴木敏則 2000 『城山遺跡Ⅶ』 財団法人浜松市文化協会

鈴木裕篤 1989 沼津市文化財調査報告書第46集『雄鹿塚
遺跡発掘調査報告書』 沼津市教育委員会

関野哲夫 栗木崇 岩名建太郎 1997 『蒲原城 平成8年
度範囲確認調査報告書』 蒲原町教育委員会

瀧澤武雄 西脇康編 1999 『日本史小百科 貨幣』 株式
会社東京堂出版

辻真人 1994 「1. 三島御殿遺跡 第1地点」『三島市埋蔵

文化財発掘調査報告Ⅲ』 三島市教育委員会

戸塚和美 大熊茂広 1992 『赤淵遺跡・中川原古墳発掘調
査報告書』 掛川市教育委員会

中川律子 菊池吉修 平野吾郎 及川司ほか 2010 静岡
県埋蔵文化財調査研究所調査報告第214集『衣原古墳群・
衣原遺跡・衣原古窯群 第二東名No.82～83地点』 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所

中野国雄 平川昭夫 袴田稔 三ツ石紀子ほか 1982 『長
久保城跡（八幡曲輪・上野南・大水濠） 大平遺跡 一般
国道246号線裾野バイパス埋蔵文化財発掘調査報告（Ⅲ）』
長泉町

中野国雄 井上輝夫 袴田稔 渡瀬治ほか 1989 『富沢・
千福馬場添・大畑・桃園入ノ洞 一般国道246号線裾野バ
イパス埋蔵文化財発掘調査報告書』 裾野市教育委員会
宮本達希 小野秀樹 1993 『河津城跡発掘調査報告書』
河津町教育委員会

山崎克巳 木村弘之 伊藤美鈴 加藤恵子 1993 『一の谷
中世墳墓群遺跡』 磐田市教育委員会

山本宏司 1998 静岡市埋蔵文化財調査報告44『駿府城跡
Ⅰ（遺物編1）』 静岡県教育委員会

山本宏司 2002 静岡市埋蔵文化財調査報告61『駿府城跡
Ⅱ』 静岡県教育委員会

渡辺浩之 辻真人 1996 『接待茶屋遺跡』 三島市教育委
員会

Process of Loss of the Coins Minted in 19th Century in Shizuoka

Kentaro IWANA

Summary: In order to trace money circulation in a certain area chronologically, it is effectual to collect examples of coins, which are rich in volume, whose term of circulation is limited short, and which have characteristics, and to classify them by setting up standards and establishing types, and then to compare them with other kinds of coins.

In this paper, firstly, I compile examples of coins: Tempo tsuho coins and Bunkyu eiho coins minted in 19th century which are the newest among modern coins and whose period of circulation was relatively short, excavated in Shizuoka (Totoumi, Suruga, Izu), a center of Japan. Second, I analyze and examine how the coins were disappeared, which reflects their character of their last moment. Third, I study to understand their external characteristics and establish a classification of types.

Key words: Tempo tsuho coin, Bunkyu eiho coin, compiling excavated cases, process of the lost, establishment of type